　　通信第二十七号　　お母さん、ありがとう

　　自分には智慧も無い、慈悲も無い、あるのは我執だけ。我執から出発して善悪を争い、他をして我の思う通りにしよう。その通りにならぬなら、そこから果てしない争いを生ずる。ましてその心で、仏様の教えまでこねくり回す。それが自分だと知れ。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大石法夫先生　ご書信　二十四￤三

　私の我執・法執の在りかた。私と母との長年にわたる権力闘争のありさまが照らしだされているご文章で

す。母とのご因縁を思うとずっと心が通わなかったことです。いつ頃だったか、高校に入学してからも反抗

期はずっとつづきました。結婚してから溝は深まり、平成元年に寺へ帰るといよいよ対立、憎しみさえ感ず

る有様でした。母は学校の教員をしていたこともあり、上から物を言うことが常でした。拠りどころが息子

ではなくなるといよいよ金品に執着していきました。それがたまらなく私は嫌でした。それではいけないと

思い優しい言葉をかけて見たりしましたが、母の反応にまた反発心が吹き出ました。大石先生に親心を感じ

ていましたのでなおさら心は離れていくばかりでした。私が「大石先生は」というと、「大石さん」と先生と

は決して言いませんでした。先生の「光あり」の歌も軍歌でよくないと言います。「どうして心を聞いてく

れないのか」いらだちはつのるばかりでした。

あるとき、母が「大石さんの母親は自分に法を聞かせて自分を救ってくれと言われたが、私はそれは無かった。息子にいい布教使に成れと言った」とその時は神妙にいったのが不思議でした。触れれば対立し傷つけあうという痛ましい在りかたが続きとうとう五、六年前から妹の家で生活することが多くなりました。私はどちらかが死なないと出会いはないと思うようになりました。そして、一年半前に家の中で転倒し肩をしたことをきっかけに病院に入院しました。我がままのため、老人ホーム、病院を三カ所変わりました。少し認知症が出たことで豊前病院に入りました。ところが自分で食事ができるようになると認知症がずいぶん改善されていきました。

見舞いに行くと「どうしたらいい」「お念仏やろ」「・・・・」「看護婦さ・・・ん」と大きな声を出したり、「病院の支払はどうなっている」「ひもじ・・・い」をくりかえします。「誰も見舞いに来てくれん・・・」「ほら、お念仏せんからや」とためがでました。私の見舞いにゆく足は遠のいていきました。

そんな中で、昨年の十月七日、母との出遭いが私に与えられました。その時のことは通信第二十一号に詳しく書かせて頂いた通りです。その後について私は母とのやり取りの専用のメモ帳を作りました。印象深い所を少し書かせて頂きましょう。

十月九日、お寺に生まれてよかった。如来様の方が先、ついていくだけ。お互いこういう目に遇ってお念仏に遇われる。お念仏で意地を張り合わんですむ。お念仏のお蔭でこうなっている。伊藤先生、大石先生がいいこと言われた、「お念仏するためにこの世に生まれて来た」最後はただ念仏やな。

十月二十九日、南無阿弥陀仏を言わそうばっかりに来てくれている。あんたは念仏いただいてよかった。私はあんたほど念仏はわからん。ありがとうよう来てくれた。

十一月五日、南無阿弥陀仏の船に乗せてもろうてあの世に行くのは有り難い。何もなくて行くのは淋しいけど。あんたのお蔭や。あんたが来てくれるのが有難い。南無阿弥陀仏が来る、あんたが来たらすぐお念仏の話になるから、子からお念仏をもらうからうれしい。それだけお念仏を喜びきる子がおってうれしい。普通は親が子に伝えるんやけど。

十一月十日、お念仏だけとあんたから言われて、しっかり身につけんならんと思う。お念仏が気持ちよく出らんところがある。うれしい心や、ありがたい心になってお念仏しようとしている。そのままに、うれしい心ないままに念仏やろ。そうやな。

　　うち（私）はあんたが救われていく姿を見てああそうかと救われていく。

　十一月二十二日、この世は損とか得とか。善とか悪とか。好きとか嫌いとか。この世の事、南無阿弥陀仏はこの世を超えられる。

十一月二十五日、車窓から、青く広い空が見える。仏心は虚空の如く、大海の如し。如来様は腹も立たせ、この世界に帰れ、気づけ、と。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

　十一月三十日、一番苦手な人が私の邪見驕慢を知らせて下さる仏さまだったのです。その前に手をつかされた時、私はもっとも輝いていたのです。書信四十信￤三．わたしにおいて母は仏様となっているだろうか。大恩人と成って下さっている。

　十二月　○日、法と自分とが一つに成れる。もともと一つであった。ありがとう。主人公は如来様。仏様におすがりしないということは、我執にすがるということやろ。うん。南無阿弥陀仏。うん。

　十二月　○日、本当に念仏（真実）。お金、地位、学問、五欲でなかった。ただ念仏のみ真実であった。法が南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏が大安心そのもの。南無阿弥陀仏を頂けるのは南無阿弥陀仏である。法蔵様である。人間に、私にはなかった。のために仏法があるのでない。法は法。法に使われる、お仕えしてゆく、それも法のはたらき。

十二月　○日、今日は早く帰る。車中にて藤解先生のテープより「私が宿業によって、苦しみ悩む業苦を如来さまが受けて下さる。。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。如来さまのお慈悲は深い、広大。

一月四日、長仁寺が信心、ご本願の燃えるようなお寺になっている？如来様の母の口を使っての願い。私はどきっとした。

　三月一六日、帰りの車中のテープ「、この身心が如来様の物になった」実は始めからそうであったのに、私がってきた。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

　三月二十九日、二人で『正信偈』を唱和させていただく。

　四月二十三日、如来様しだい、生かしてくれるか、死ぬか。

　六月十八日、熱が下がらないので東病院へ移る「どう」「風邪を引いた」私に風邪がらないように母は布団を自分の口元に引き寄せた。母も優しい所があるな。母にしてはめずらしく針仕事をする姿を見た時のほっとした感じを思い出した。これならしばらく大丈夫と思い失礼した。それが私と母との最後のお別れでした。

　六月二十二日、朝出がけに妹から電話があり病院から話があるという。わたしは法事があるため急には

行けませんでした。法事の読経、法話が終ったちょうどその時、母が亡くなったしらせを受けました。私の心は実に落ち着いているので、自分でも不思議でした。法事の家は母の自慢の弁論大会全国優勝（高

校で全国優勝、小学校の時に母が指導）の教え子の家でした。

　母の最期をみとったのは妹の主人でした。く「自分でも不思議に口から、有難うございました。南無阿

弥陀仏、南無阿弥陀仏と出た」と、すると母の眼から一筋の涙がこぼれ落ちて息を引き取ったということで

した。死因は急性胆のう炎でした。

葬儀から四日後、聞光道のご法座のとき、坊守の法喜が母と私の関係を「北風と太陽」のようだったと言ったのが印象に残りました。「教法を大事にするお寺、お念仏申すこと」と力んで一生懸命にやっていたことが実は北風のように母に「あんたの言う念仏なら死んでもしない」というような対立を生んでいたのです。

昨年の十月七日のあの時、阿弥陀如来にたのむ（帰依）ということが無かったなら、母と私は空しい別れ方をして、生涯それをひきずっていたことでしょう。いや、本願の光に遇うまでずっと流転し続けていくのでした。

母は浄土へ還りました。行年九十歳、法名　称名院釋尼香陽（江本太陽子）。お通夜、葬儀が終り、今私は超一流のお酒を飲んだ後のようなさらっとした感じがしています。一貫してご本願のおはたらきが感じられます。

　通夜、葬儀にあたり総代さん方にお集まりいただき、私の願いを聞いて頂きました。「派手にせず、世間ごとのようにしたくないのが喪主としての願いです」と、従って特別焼香や本山代行などはしません。院号もつけない予定でしたが坊守の要望があり、私が付けることにいたしました。お念仏のご因縁であったことから「称名院」とさせて頂きました。

　大石先生から「通夜、葬儀はお礼の心です」と教えていただきその気持ちでご門徒さんの葬儀をさせて頂いて来ました。このたびは私自身が実践させていただくご縁です。

　お通夜のお礼の挨拶は長めになりました。形式で終わりたくなかったからです。本堂に入りきれないご門徒さんをはじめご縁の方々のお集まりでした。

　葬儀は葬祭場の大広間をお借りしました。祭壇は白花で統一しました。僧侶の服装はご導師以外のご寺院さん方には間衣輪袈裟という真宗僧侶の平服の服装でお願いしました。権威的にならない願いです。読経、御三方の弔辞も尊く素晴らしい響きでありました。二百人分のいすが計ったようにちょうどいっぱいになりました。世間の肩書で参列される人はほとんどありません。最後のご挨拶のときがせまった時、私のなかの世間心の煩悩が瞬時に沸きました。「ある人達を止めたな」頭が真っ白になりました。瞬時に西川和栄先生の如来のおという教えが出て来まして、すべてお任せで挨拶をさせて頂きました。後で婦人会の方々がお通夜の時は力みがはいっていたが、葬儀の時は力みが抜けていたということでした。何を話したのか無意識的でした。合掌して参列のお一人一人にお礼させて頂こうと思わせられたことは覚えていますがあとは自然に任せました。「どうしてあんなに落ち着いてできるのですか」と、あとで問われた方が二人おられます。すべてがご本願のおはたらきであります。

本願念仏を離れたら、我執にくくられて、人を思うようにしようとします。母だけにではありません。妻に子に一切のいのちに。さらに自分自身に対して自分の思うように自分をコントロールしよう、できるとして来たのです。本能的にそうしてしまうのです。そして、そうならないから勝手に苦しみ地獄をつくり、不幸な方、不幸な方へと流転して来たのです。「あわれというもなかなか愚かなり」そのものです。

・のに

　　もうあはぬ身となりにせば

　　もきわもなし

　　苦海のいかがせん

無始以来の我執・法執の迷いに沈んできた自分のすがたに出遭うこともなく、驚きもせず。負けんぞ、がんばるぞと自分をい立たせては六道輪廻してきたのが私です。そのことに何の疑いも無くやってきました。本願を疑い本願に反逆しているなど思いもしませんでした。多くの人も大なり小なり同じことを考えていると思っていました。真宗ではそういう在りかたを自力の迷いと言ってきたのです。苦しく、不安なはずです。仏の世界は六道輪廻の人間界を超越した世界であります。極楽とか浄土といわれます。自力の人間世界を超えた他力の世界です。こちらからは絶対に手の届かない世界であります。太陽や月や星に手が届かないように、ところが光は向こうから来ています。仏様の光、お慈悲は向こうからのおはたらきです。他力と申します。如来の本願力とも申します。この御力が無始よりの迷いを照らし救い取る力があるのです。と申します。我執・法執の人間の計らい、思いが跡形もなく消されます。そこがいのちの帰る世界となります。すべてのいのちの世界と通じ合えるようになるのです。コンプレックスや孤立感が無くなります。豊かさ、ありがたさ、落ち着きが与えられるのです。

「弥陀の誓願不思議にたすけられる」と申されているのです。探してきた世界、何か求めずにはおられなかった世界、帰りたかったのような世界だったのです。これまでの苦しかったこと、悲しかったこと、嫌だったことすべてはこの世界にうためだったのか。オセロゲームの最後の一手で黒が白に全部裏返るように人生の解決がつき、この世に生まれて来た目的が遂げられて、常に新しい生活が開かれてきます。人が本願に救われることを願うようにならされて来ます。

本願力にいぬれば

　　　しくすぐる人ぞなき

　　　功徳の宝海みちみちて

　　　煩悩のへだてなし

広々とした海のような広大な背景が誕生して今までのような喜びでない慶びを身近な日常の生活の中で少しずつ味わえるようにならされます。これは私の才能や努力や感性で出来る世界ではないから、仏様のお陰、如来のごだなと思わされます。本願力のご功徳であります。自然にお念仏は「有難いな」と、ご恩報謝のお礼とならされます。

私において一番苦手であつた母が私の我執・法執の邪見驕慢を照らし出して下さった佛様となってくれました。私からは絶対にあり得ない事実であります。大石先生が実際に見せてくれたお育てのお蔭であります。私には絶対にあり得ない世界であります。師恩、仏恩であります。

今あらためて、この通信第二十七号を書かせて頂きまして、母が仏と成って私を救うて下さったことを実感さされます。読者の皆さま、一切の皆さまありがとうございました。私の中にされた不可思議のいのち、光明無量、寿命無量の光のが私の宿業、業苦をご縁として炭に火が燃え移っていくように生長されています。これからもお育てのことよろしくお願い申し上げます。

　南無阿弥陀仏

　南無阿弥陀仏

令和一年（二〇一九）七月七日

常照なお、香典等のお気遣いは無用であります。お願いします。